

## I. レーザ協会小史

### (1) レーザ加工研究会発足

アインシュタインの予言(1916年)から44年後の1960年(昭和35年)に米国ヒューズ研究所の Maiman らによってルビーレーザーの発振に初めて成功した。それ以来、各種レーザーが1960年代に産声をあげた。「レーザーは夢の光」と言われ、可能性を秘めた光として多くの分野で注目され基礎および応用研究が活発化以来、我が国においても数年後にはルビーレーザーの加工装置による初歩的な発表が学会などでみられるようになり、さらに1973年(昭和48年)には(株)東芝により国際初のYAGレーザー穴あけ機が出現し、1979年(昭和54年)には三菱電機(株)から国産の炭酸ガスレーザー加工機が、また、1980年(昭和55年)には(株)アマダから炭酸ガスレーザー加工機が産業界にデビューした。

このようなレーザーの黎明期に海外の情報をいち早く収集し、レーザー動向と産業応用への可能性を探るべく研究会の創立が準備された。1972年(昭和47年)1月28日に研究会会則が制定され、その翌月2月1日に東京都千代田区神田神保町にあった工学研究社のミーティングルームにて、産官学が連携してレーザー加工技術に関する研究会を立ち上げた。ここにレーザー協会の前身である「レーザー加工研究会」が発足した。世話人は東京大学から中央大学へ赴任し、その後に教授となった島川正憲(初代会長)であった。



図 1-1 「レーザー加工研究会」の発足

## (2) 会の発展と名称の変更

### ① 名称の変更

レーザ加工研究会は、レーザによる加工、計測に関心を持つ研究者、技術者、ユーザ、国内メーカー、輸入商社等に声を掛け、研究会、講演会、シンポジウムを通して、我が国のレーザ研究の指導的立場に立って関係工業会の発展やレーザ加工技術の向上に多大な貢献をする目的で創立された（研究会趣旨より）。1976年（昭和51年）4月 島川初代会長の突然の死去に伴い、同年5月 小林昭氏（当時、東京芝浦電気株、生産技術研究所精密加工研究センター長）が会長代行となり、その後会長となった。また、同研究会の創立から2年後の1974年（昭和49年）に、レーザ協会誌の前身である「レーザ」Vo. 1, No. 1が発行された。

1977年（昭和52年）3月22日の総会でレーザ加工研究会は「レーザ応用技術研究会」に名称が変更された。それに伴い、研究会ではレーザの発振器、システム装置、レーザによる加工、計測及び医療などを扱うこととなった。また、1982年（昭和57年）の5月総会において、産業界へのレーザ技術の普及支援と実学に基づき産業界に役に立つ会とするべく、当該研究会を「レーザ協会」に改名され、現在に至っている。

### ② 会の発展

2003年（平成15年）5月16日、当協会の扱う範囲をエネルギービーム加工（レーザビーム、電子ビーム、イオンビームなど）とし、レーザを中心にビーム加工全般を広く扱うことが決められた。

2006年（平成19年）、レーザ協会の活動に地域活性化事業を加えることが決定された。従来の研究会、セミナーに加えて、年に一度、各地に順次出向いてレーザ技術の講演を行なうもので、地元の工業技術センターなどの公共の産業系団体と共同で開催することとした。さらに、2007年には、時流に遅れることのないように、インターネット上でホームページ(HP)の作成が決められた。その後、アドレスが付与され活動の一部はHPに掲載されるようになった。